島根医科大学紀要，第22巻，１～14頁，1999年12月

ゲーテと結婚
―詩《朝の嘆き》と《訪れ》を巡って―

(ゲーテ／結婚／詩)

栗花落　和　彦*

Goethe and His Marriage
― On His Poems “Morgenklagen” and “Der Besuch”―

(Goethe／marriage／poem)

Kazuhiko TSUYU*

Ⅰ．詩《朝の嘆き Morgenklagen》

ああ　お前　気紛れで忌ま忌ましいほどに可愛い少女よ
俺に打ち明けておくれ　お前が俺をこんな拷問に掛け
お前が自ら言い交した約束を破ったことの罪を
どうして俺が背負い込んでしまったのかを

昨晩　あれほど親しげに俺の両手を握り締め
あれほど愛らしく囁いてくれたのに
「ええ　参ります　明け方近く参ります
　きっと必ず　あなた　あなたのお部屋に」と

俺は　戸口を寄せ掛けたままにしておいた
前もって　蝶番を充分に確かめて
ギイギイ軋まないのを　本当に喜んでいた

待ち侘びる何という一夜が　過ぎ去ったことか！
俺は目を覚ましたまま　四半時毎に時を数えたのに
俺がほんの僅かな瞬間　眠り込んでも
俺の心は　絶えず目を覚まし続け
軽い微睡みから　俺を起こした

そう　そんな時　あれほど静かに全てを覆っている
暗闇を　俺は祝福し
遍く静寂を喜び
もしや物音がしまいかと
絶えず　静寂に耳を澄ませた

「俺が考えるように　考えてくれるなら
　俺が感じるように　感じてくれるなら
　少女は　朝を待ち受けず
　きっと今にも来てくれるだろうに」

小猫が一匹　頭上の屋根裏をピョンピョン跳ね
隅っこの小鼠が　ギシギシ歯音を立て
何かは知らぬが　家の中で動く気配がすると
そのたび俺は　お前の足音を耳に出来たらと思い
そのたび俺は　お前の足取りを耳にする思いがした

こうして　俺は長々と　いよいよ長々と横たわっていた
そして　夜が早くも白み掛けた
そして　あちらこちらでザワザワ騒めく音がした

「あれは少女の家の戸口なのか　我が家の戸口であれば！」
俺は両肘を付いて　寝床に座り
半ば明るんだ戸口の方を
もしや動き出しはしないかと　見つめた
両開きの扉はふたつとも　寄せ掛けられたまま
微かに軋む蝶番に　おとなしく掛かっていた

そして　日はますます明るくなった
俺の耳に聞こえたのは　日当を稼ぎに急ぐ
隣人の家の戸口が早くも開く音
ほどなく続いて　車という車がガラガラ動く音
街の城門も今や開いていた
そして　活気溢れる市場に出されるがらくた全てが
入り乱れて動き出した

今や　家の中を行き来する音
階段を昇り降りする音
時には　戸口がギイギイ軋み　足をバタバタ鳴らす音
そして俺は　美しい生から別れられないように

*ドイツ語教室　Department of German

己れの期待から　未だ離れられなかった

とうとう　実に憎らしい陽の光が
我が家の窓という窓　壁という壁に当たると
俺は跳ね起きて　庭へと急いだ
熱く思い焦がれた我が息を
涼やかな朝の大気で薄めるために
もしやお前に庭で出会うために
なのに今　お前は園亭にも
高い菩提樹の木陰道にも　見つからない

O du loses, leidigliebes Mädchen,
Sag' mir an, womit hab' ich's verschuldet,
Daß du mich auf diese Folter spannest,
Daß du dein gegeben Wort gebrochen?

Drucktest doch so freundlich gestern abend
Mir die Hände, lispeltest so lieblich:
„Ja, ich komme, komme gegen Morgen
Ganz gewiß, mein Freund, auf deine Stube."

Angelehnet ließ ich meine Türe,
Hatte wohl die Angeln erst geprüfet
Und mich recht gefreut, daß sie nicht knarrten.

Welche Nacht des Wartens ist vergangen!
Wacht' ich doch und zählte jedes Viertel:
Schlief ich ein auf wenig Augenblicke,
War mein Herz beständig wach geblieben,
Weckte mich von meinem leisen Schlummer.

Ja, da segnet' ich die Finsternisse,
Die so ruhig alles überdeckten,
Freute mich der allgemeinen Stille,
Horchte lauschend immer in die Stille,
Ob sich nicht ein Laut bewegen möchte.

„Hätte sie Gedanken, wie ich denke,
Hätte sie Gefühl, wie ich empfinde,
Würde sie den Morgen nicht erwarten,
Würde schon in dieser Stunde kommen."

Hüpft' ein Kätzchen oben übern Boden,
Knisterte das Mäuschen in der Ecke,
Regte sich, ich weiß nicht was, im Hause,
Immer hofft' ich, deinen Schritt zu hören,
Immer glaubt' ich, deinen Tritt zu hören.

Und so lag ich lang und immer länger,
Und es fing der Tag schon an zu grauen,
Und es rauschte hier und rauschte dorten.

„Ist es ihre Türe?　Wär's die meine!"
Saß ich aufgestemmt in meinem Bette,
Schaute nach der halb erhellten Türe,
Ob sie nicht sich wohl bewegen möchte.
Angelehnet blieben beide Flügel
Auf den leisen Angeln ruhig hangen.

Und der Tag ward immer hell- und heller;
Hört' ich schon des Nachbars Türe gehen,
Der das Taglohn zu gewinnen eilet,
Hört' ich bald darauf die Wagen rasseln,
War das Tor der Stadt nun auch eröffnet,
Und es regte sich der ganze Plunder
Des bewegten Marktes durcheinander.

Ward nun in dem Haus ein Gehn und Kommen
Auf und ab die Stiegen, hin und wieder
Knarrten Türen, klapperten die Tritte;
Und ich konnte, wie vom schönen Leben,
Mich noch nicht von meiner Hoffnung scheiden.

Endlich, als die ganz verhaßte Sonne
Meine Fenster traf und meine Wände,
Sprang ich auf und eilte nach dem Garten,
Meinen heißen, sehnsuchtsvollen Atem
Mit der kühlen Morgenluft zu mischen,
Dir vielleicht im Garten zu begegnen;
Und nun bist du weder in der Laube
Noch im hohen Lindengang zu finden.

十二連五九行から構成されている無韻五脚の〈トロヘーウス（強弱格）Trochäus〉調のゲーテの詩《朝の嘆き》[1)]の成立時期ははっきりとは確定されていない。この詩が初めて一般読者の目に触れたのは，ライプツィヒ在住の出版者ゲッシェン（Georg Joachim Göschen: 1750-1828）によって初めて刊行された《ゲーテ著作集 Goethes Schriften》（全八巻1788-90年）の最終第八巻〈雑詩集 Vermischte Gedichte〉（1789年）においてであった。詩《訪れ Der Besuch》（Ⅱに後述）と同様にクリスティアーネ・ヴルピウス（Johanna Christina

Sophia（Christiane）Vulpius: 1765-1816）との恋愛を創作契機として成立したこの詩が，少女を待ち設ける期待感が当て外れに終わったことに対する男の嘆きを内容としていることは，一見すると奇妙に思われる。クリスティアーネとのいわゆる身分違いの結婚──法律上の正規な手続きを踏まない内縁関係（Konkubinat）──に踏み切ったために，シュタイン夫人（Charlotte Albertine Ernestine von Stein: 1742-1827）を始めとするヴァイマルの人々から白眼視されたゲーテが，自分達の真摯な関係を世間の目からすっかり遠ざけてしまうために，むしろ逆手を取って，当時社交界に蔓延していた軽薄な恋愛生活の一端をこの詩に事寄せて巧みに見せ掛けたものであろうか。そうであるならば，この詩は，少女の愛を素朴に信じる〈俺〉が歌い上げる《訪れ》とは見事な対照を形成していよう。〈雑詩集〉の〈第一集 Erste Sammlung〉をゲーテに提示されたヘルダー夫人（Caroline von Herder: 1750-1809）は早速10月１日，当時イタリアに滞在していた歴史哲学者にして詩人である夫ヘルダー（Johann Gottfried von Herder: 1744-1803）に宛てて，このふたつの詩に言及する書簡を送っている[2)]。

> ゲーテは私に彼の詩集の第一部を贈ってくれました。その中には実に美しいものが含まれております。とりわけふたつの牧歌的な（idyllenartig）詩は，私が専ら気に入っているものです。私はかなり理性的に彼とそれらの詩について語り合ったのです。…私はあなたにこの第一集からふたつの詩を贈り物として同封します。

この「ふたつの牧歌的な詩」こそは，《イタリア紀行 Italienische Reise》直後のヴァイマルにおける愛の関係がゲーテに最初にもたらした詩的成果である《朝の嘆き》と《訪れ》に他ならない。ゲーテが1788年10月31日友人の哲学者ヤコービ（Friedrich Heinrich Jacobi: 1743-1819）に宛てて，表題のない草稿のままの詩《朝の嘆き》を添えた書簡を送り，「この書簡は全く内容がないわけではありません。ここに〈恋愛物 Erotikon〉を一篇添えております」と述べている通り[3)]，この詩は，同時期の88年秋から90年春にかけて成立し古代の伝統的詩形式である二行詩（Distichon）に則って初めて連作された詩集《ローマ悲歌 Römische Elegien》──その原題はまさしく《ローマ恋愛詩集 Erotica Romana》──の先駆けとなる作品であった。クリスティアーネと巡り逢って味わった精神的・官能的幸福を成立契機としながらも，ゲーテは彼女によって自分に分け与えられた心からの喜びを直接ありのままにではなく，自分達の置かれた事態を客観的に眺める冷静な眼差しを持って，従って半ばからかい気味に歌い上げる恋愛詩を創作したのである。

＊

詩《朝の嘆き》は，愛の到来によってもたらされた思い掛けない混乱と動揺を男が歌う詩《クピード Cupido》[4)]とは全く対照的に，愛の到来を待ち設ける男が密会の約束を破棄した少女に空しく欺かれて苦悩に陥ることを全体的な内容とする巧みな物語となっているが，詩の中に最後まで登場しない少女への愛によって翻弄される男の嘆きという瞬間を取り出せば，このふたつの詩には通底するものがある。

第一連では，《クピード》の冒頭で呼び掛けられる「クピード　悪戯好きで気紛れな小僧よ！」と同様に，「ああ気紛れで忌ま忌ましいほどに可愛い少女よ」という冒頭の呼び掛けの言葉によって，少女が約束を破棄したことに対する〈俺〉の嘆きが早くも表現されている。とりわけ「忌ま忌ましいほどに」という言葉には，この詩全体の内容の顛末を既に規定する響きが込められている。「お前が俺をこんな拷問に掛け」という表現は，愛する男が陥った主観的な心理状況を充分に伝えてはいるが，客観的に見れば些か誇張された印象を否めない。これに続く第二連では，「ええ　参ります…あなたのお部屋に」と言う少女によって心の底から与えられたかに見える言質だけが〈俺〉が彼女を待ち受けることの唯一の拠りどころとなっている状況が歌われている。この最初の二連は，第三連以下の内容を先取りして総括した詩句であり，少女が彼の許に結局姿を現わさなかったことは，この時点で既に明白である。従って第三連以下では，少女の約束を信じ込んだ〈俺〉がどのように少女を待ち受けたのか，その様子を滑稽なまでに詳細に描写することに，詩の内容表現の焦点が移動している。

第三連では，少女が忍んで来るのを知らせる合図として，鍵を掛けないで寄せ掛けたままにした戸口の蝶番の音が利用される。蝶番の音がギイギイ軋まないのを〈俺〉が喜ぶのは，後の第九連一行目の「あれは少女の家の戸口なのか　我が家の戸口であれば！」において推測されるように，〈俺〉と少女は各々独立した家屋にではなく同じ一軒の共同住宅に暮らしているので，あまり大きな音がして同じ屋根の下に住む他の住居の人々に不審に思われるのを彼が少女のために気遣っているからである。とはいえ，全く音がしないのでは密会の合図にならないので，第九連六行目に「微かに軋む蝶番」と周到に描写されているように，この蝶番

は人の気配を感じさせるほどの音は立てられるように微妙に調整されているものと見られる。このように少女を一方的に愛する男の涙ぐましい真面目な努力が窺えれば窺えるほど，一層男の姿は，経緯を客観的に眺める読者を滑稽さと哀れさとが綯い交ぜになった複雑な感情に誘わざるを得ない。

第四連から第七連にかけては，〈俺〉が少女を一夜の間「待ち侘びる」ことの苦しみではなく，むしろその喜びが歌われている。少女と逢う約束の時間は「明け方近く」なので，〈俺〉が夜中から長々と待ち侘びる必要は全くない。しかし第五・六連の独白において明らかなように，全身を目と耳の感覚器官と化して，辺りを支配する暗闇を見つめ静寂に耳を澄まし，「頭上の屋根裏をピョンピョン跳ね」る小猫や「ギシギシ歯音を立て」る隅っこの小鼠の物音から少女の足音を感じ取ろうとする〈俺〉は，朝を待ち切れないのは少女の方であろうと事態を極めて楽観視している。つまり彼は相手の心に自己を同化させるのではなく，相手の心を自分の気持に引き寄せて「考え」「感じ」る楽天的な性格の持主であり，そこには少女に対する自己の強引な主張や感情の押し付けが看取されるのである。客観的に眺めれば，〈俺〉の心に自己に対する過信が潜んでいることは見紛いようもない。彼は辺りを支配する「暗闇を祝福し」「遍く静寂を喜」んでいるが，それはあくまでも少女が忍んで来るまでの暗闇と静寂に対するものに過ぎず，少女の到着によってもたらされるであろう光と活気の前触れとして〈俺〉の心の中で対比されてもいる。従って暗闇と静寂の中で少女を待ち侘びる事態は，何ら彼を退屈させるものではないのである。

第八連以下において，「夜が早くも白み掛け」て一日の生活の賑わいが始まるとともに次第に焦り出す〈俺〉の気持の変化は，寝床に「長々と　いよいよ長々と横たわっていた」仰臥の姿勢から，「両肘を付いて寝床に座」る半立座の姿勢への身体の移動に如実に窺うことが出来よう。「あちらこちらでザワザワ騒めく音」によって彼の期待が時折り喚起されるが，その都度彼は失望を味わわされる思いに至る。そして日が「ますます明るくなっ」て行くに連れて，共同住宅に面した通りで車がガラガラという往来の音を立てたり，「活気溢れる市場」が賑わいを見せてくるのみならず，家屋の中でも住人達が「戸口がギイギイ軋み　足をバタバタ鳴らす」という具合に活況を呈するようになる。夜のうちに鋭敏さを増した〈俺〉の耳には，街の喧騒が人一倍大きく伝わってくるようである。しかし少女は相変わらず彼の許にやって来ない。とうとう朝になって太陽の光が部屋の中に差し込む事態になってようやく，〈俺〉は寝床から起き上がり，かつて自分達が密会の場所に使った「園亭」や「高い菩提樹の木陰道」へと自ら少女を捜しに出掛けるのであるが，少女はどこにも見当らず，結局は少女にからかわれたに過ぎないことに〈俺〉は思い至る。最終第十二連における末尾の二行は，主観を一切交えることなく，少女がどこにも見つからないという事実だけを――現在形で――極めて簡潔に伝えているため，少女は永遠に見つからないのではないかという印象を読者に強烈に与える形で終わっている。

この詩の主題は，詩の内部に最後まで登場しないことによって，つまりはまさしく不在によって却って重要な役割を果たす少女のからかいと，その少女を待ち侘びる男の生真面目さとの対比そのものの構図である。しかし男が自己の生真面目な主観的真情を詩の内部で吐露すればするほど，その経緯を外部から客観的に眺める読者の目には，その生真面目さに潜む無自覚な傲慢さが自ずから浮かび上がってくる仕掛けがそれだけ一層透けて見えるのであり，この詩は，愛する男が発する「朝の嘆き」の悲愴感とは裏腹に，どこか滑稽な雰囲気を全体的に漂わせている。この雰囲気を醸し出している主要な原因は，少女を待ち設けている間に男が自己の周囲の状況に対して全身を感覚器官に変貌させ，擬態語・擬声語を様々に駆使して行なう極めて冷静な客観的観察――これを行なっているのはむしろ詩人自身と言えよう――と，それらの感覚作用が精神的に何ら統合されないままに男が少女に対して寄せる過剰な主観的情熱との間に大きな落差があるという点に存している。更に言えば，詩《訪れ》において眠っている少女を起こすのに躊躇いを見せることによって思いも掛けず喚起された美に対する男の自覚的な反省意識に相応する統合的な内面感覚がこの詩の主人公には全く欠如しているという点に存しているのではないだろうか。

Ⅱ．詩《訪れ Der Besuch》

最愛の女の許に　俺は今日忍び込もうとした
だが　戸口には鍵が掛かっていた
俺はポケットに鍵を持っているではないか！
懐かしい戸口を　そっと開けるのだ！

玄関の間に　少女の姿は見当らず
部屋にも　見当らなかった
ようやく　小さな寝室をそっと開けると
少女は実に愛らしく眠り込み

服を着たまま　ソファの上に横たわっている

仕事をしながら　少女は眠り込んでいた
編み針の付いたままの編み物が
組んだ華奢な両手の間に安らっていた
そして　俺は傍らに腰を下ろし
少女を起こしたものかと　心秘かに思案した

そこで俺は　少女の瞼に憩らう
快い平安を眺めた
唇には　静かな誠実が
両頬には　愛らしさが宿っていた
そして　良き心の無垢さが
胸のうちに揺らめいていた
少女の四肢のひとつひとつが　好ましく横たわり
神々の甘美な香油で解き放たれていた

欣然として　俺は座り尽くした
そして眺めているうちに　少女を起こしたい気持は
秘かに縛られ　次第に強く抑えられた

俺は思った　ああ　愛しいお前
あまねく不実なところを漏らすという微睡みが
お前を損なうことはあり得ないのか
友の優しい思いを掻き乱すものを　暴くことはあり得ないのか

開けばただそれだけで俺を魅了する
お前の優しい目は　閉じている
お前の甘美な唇は　動かず
語り掛けもせず　口づけもしない
いつもなら俺に絡みつくお前の両腕の
魔法のこの枷は　解き放たれている
そして　甘美な言葉の魅惑的な伴侶たる手は
身動ぎもしない
俺がお前のことをどんな風に考えようとも　思い違いであれば
俺がお前のことをどれだけ愛そうとも　己れを欺くことであれば
アーモルが目隠しもせず　俺の傍らに立った今
俺はそれを見つけ出さなければならないのだが

長い間　俺はこんな風に座って
少女の価値と俺の愛を　心から喜んだ
眠っている少女が　これほども俺の気に入ったため
少女を起こす勇気が　俺にはなかった

そっと　俺は橙ふたつと薔薇を二本
少女の小さな机の上に置く
こっそりこっそりと　俺は忍び出る

ねえお前　目を開けると
すぐに　この色鮮やかな贈り物に目を留め
戸口が閉ざされているのに　一体どうして
こんな好ましい贈り物があるのか　と驚くだろう

俺が今夜　あの天使に再会すれば
ああ　少女はどれほど喜んでくれることか
俺の優しい愛のこの捧げ物を　倍にして報いてくれるのだ

Meine Liebste wollt' ich heut beschleichen,
Aber ihre Türe war verschlossen.
Hab' ich doch den Schlüssel in der Tasche!
Öffn' ich leise die geliebte Türe!

Auf dem Saale fand ich nicht das Mädchen,
Fand das Mädchen nicht in ihrer Stube,
Endlich, da ich leis' die Kammer öffne,
Find' ich sie gar zierlich eingeschlafen,
Angekleidet auf dem Sofa liegen.

Bei der Arbeit war sie eingeschlafen;
Das Gestrickte mit den Nadeln ruhte
Zwischen den gefaltnen zarten Händen;
Und ich setzte mich an ihre Seite,
Ging bei mir zu Rat', ob ich sie weckte.

Da betrachtet' ich den schönen Frieden,
Der auf ihren Augenlidern ruhte:
Auf den Lippen war die stille Treue,
Auf den Wangen Lieblichkeit zu Hause,
Und die Unschuld eines guten Herzens
Regte sich im Busen hin und wieder.
Jedes ihrer Glieder lag gefällig
Aufgelöst vom süßen Götterbalsam.

Freudig saß ich da, und die Betrachtung
Hielte die Begierde, sie zu wecken,
Mit geheimen Banden fest und fester.

O, du Liebe, dacht' ich, kann der Schlummer,
Der Verräter jedes falschen Zuges,

Kann er dir nicht schaden, nichts entdecken,
Was des Freundes zarte Meinung störte?

Deine holden Augen sind geschlossen,
Die mich offen schon allein bezaubern;
Es bewegen deine süßen Lippen
Weder sich zur Rede noch zum Kusse;
Aufgelöst sind diese Zauberbande
Deiner Arme, die mich sonst umschlingen,
Und die Hand, die reizende Gefährtin
Süßer Schmeicheleien, unbeweglich.
Wär's ein Irrtum, wie ich von dir denke,
Wär' es Selbstbetrug, wie ich dich liebe,
Müßt' ich's jetzt entdecken, da sich Amor
Ohne Binde neben mich gestellet.

Lange saß ich so und freute herzlich
Ihres Wertes mich und meiner Liebe;
Schlafend hatte sie mir so gefallen,
Daß ich mich nicht traute, sie zu wecken.

Leise leg' ich ihr zwei Pomeranzen
Und zwei Rosen auf das Tischchen nieder;
Sachte, sachte schleich' ich meiner Wege.

Öffnet sie die Augen, meine Gute,
Gleich erblickt sie diese bunte Gabe,
Staunt, wie immer bei verschloßnen Türen
Dieses freundliche Geschenk sich finde.

Seh' ich diese Nacht den Engel wieder,
O, wie freut sie sich, vergilt mir doppelt
Dieses Opfer meiner zarten Liebe.

十一連五五行から構成されている無韻五脚の〈トロヘーウス〉調の詩《訪れ》[1]は《朝の嘆き》と同様，1786年９月３日から1788年６月18日に亙る《イタリア紀行》を終えてヴァイマルに帰国したゲーテがクリスティアーネ・ヴルピウスと開始した同居生活を創作契機として1788年の夏頃に成立した作品と見做されている。しかしこの詩が初めて印刷に付され一般読者の目に触れたのは，1795年秋にシラー（Friedrich von Schiller: 1759-1805）が編集刊行した雑誌《1796年版詩神年鑑 Musenalmanach für das Jahr 1796》においてであり，1806年から10年にかけて刊行された三回目の《ゲーテ全集 Goethes Werke》（全十三巻　テュービンゲン　コッタ書店発行）の第一巻の〈詩集〉(1806年)にようやく収載されることとなった。この詩は本来，1789年に刊行された初めての《ゲーテ著作集》の最終第八巻に収載された〈雑詩集〉のうちの〈第一集〉と題された原稿の掉尾を飾る予定であった。しかしこの詩集が印刷に付される前の1788年11月６日ゲーテは出版者ゲッシェンに宛てて，「私はゆえあって，〈第一集〉の最後のふたつの詩――《享受 Genuß》と《訪れ》――は印刷して頂きたくないのです。それゆえ恐れ入りますが，このふたつの詩を原稿から切り離して私に送り返して下さい」と書き送っている[2]。ゲーテがこれらの詩を詩集に収載するのを見送った理由は，詩集の写しに目を通したシュタイン夫人がこれらの詩を削除するようにと，ゲーテに頼んだことにあると見られている。この時期のシュタイン夫人は７月13日に結ばれたゲーテとクリスティアーネの事実上の婚姻関係をまだ知らなかったようなので，彼女がこの詩の内容から両者の恋愛を具体的に想起することは不可能であろう。むしろシュタイン夫人はこの詩を読んでローマにおけるゲーテの恋愛体験を鋭く嗅ぎつけるとともに，その当時既に冷却状態にあったヴァイマルの友人達とゲーテの関係が，恋愛を積極的に肯定する詩の内容と鋭く対比される形で否定的なものとして一般読者に憶測されるのを嫌ったのではないかと思われる。

1788年11月16日ゲーテはイェーナ（Jena）からヴァイマル公国（Sachsen-Weimar-Eisenach）を統治するカール・アウグスト公（Herzog Karl August: 1757-1828）にこの詩を添えて書簡を送り，「私は再び自分の心のうちに息づき始めている学生気質（Studentenader）をあなたに対して恥じてはおりません」と書面を結んで自己の心中を吐露している[3]。これは，かつてイタリア紀行以前の宮廷生活において硬化しつつあったゲーテの血管（Ader）がイタリアにおいて新たに再生を果たし，現実的にはヴァイマルにおいてクリスティアーネとの恋愛によって再び脈動し始めたことの証左であると言ってよいであろう。イタリア紀行を経験したゲーテは今や自己本来の使命を自覚して，ひたすら芸術と自然科学の研究に身を捧げる決意を示している。既にゲーテはイタリアを去る（1788年４月23日）直前の３月17日ローマから，アウグスト公――イタリアにおけるゲーテの生活と活動を寛大さと理解力に満ちて許可してくれた唯一の人物――に宛てて，「芸術家」としての自己を再発見したことによって，煩わしい公務から一切身を辞し「客人」として遇されることを願う旨の書簡を送っている[4]。

私は恐らくこう申し上げることが許されるでしょう。私はこの一年半の孤独のうちに自己自身を再発見したのです。しかし何者としてでしょうか。──芸術家（Kunstler）としてなのです。私がなおその他に何者であるかは，あなたがご判断されてお役に立てて下さることでしょう。あなたのお手紙のひとつひとつが私の目にはっきりと見せて下さっていますように，あなたがご自身の絶え間なく活動する生を通してますます拡大され深められたのは，何のために人間達は必要とされ得るかということについての君主に相応しいあの知識なのです。このご判断なら私は喜んで従います。私を客人（Gast）としてお迎え下さい。あなたのお側にあって私に自己の存在を精一杯満たし，人生を享受させて下さい。そうすれば私の力は，ある高みから今や開かれて集められ浄化される泉のように，あなたのご意志のままに容易にどこへなりとも導かれることが出来るでしょう。

この願い通りゲーテは，イルメナウ（Ilmenau）鉱山の監督業務などを除いて実質的に官職から解放されるとともに，枢密院と内閣の一員として会議に列席する権利を与えられたことによって，十分な報酬と時間と名誉を持つ身分となる。しかし一方では，ヴァイマルにいる周囲の人々と自分との間に横たわっている距離の大きさに気付いて，ゲーテは深い失望感を隠すことが出来なかった。彼はイタリア滞在中からヴァイマルの友人達に書簡を送って自己の内面・外面に亙る様々な経験を知らせようと努めてきたが，彼等に対して以前のような親しい関係を再発見することは殆ど出来なかった。帰国当初の1788年７月22日ゲーテはシュタイン夫人に宛てて，「曇った空があらゆる色彩を呑み込んでしまいます」と書き送ったように[5]，イタリアとドイツを様々な角度から比較しがちであったゲーテの思考方法にもその責任の一端があったのかも知れない。つまり彼が「最高の意味における古典の地の現在」である南国イタリアを称賛し北国ドイツを非難することは，そこに住むヴァイマルの友人達に対して，取りも直さず自分達までもが非難されているのだと受け取られるような不幸な錯覚を抱かせてしまったのである。ゲーテ自身，帰国当時の深い絶望感を書き残している[6]。

形式豊かな地イタリアから私は形態のないドイツへと追い返されていた。明るく晴れた空を陰欝な空と交換することになった。友人達は私を慰めて元通り自分達の方へ引き寄せるどころか，私を絶望的な気分に追いやった。この上もなく遠くて殆ど知られていない諸対象に対して私が歓喜し，失われたものに対して私が苦悩し嘆くことは，彼等を侮辱しているように見えた。私は皆の関心の的ではないことに気づいた。私の言葉を理解する者は誰もいなかった。この気まずい状態の中で私は自分を見出す術を知らなかった。外面的感覚なら慣れるはずの欠如感が大き過ぎるあまり，精神が覚醒し，その損害の補償を求めたのである。

1789年２月２日シラーがその友人ケルナー（Christian Gottfried Körner: 1756-1831）に宛てた激越な内容の書簡は，友人達の側から見たゲーテの姿および彼と旧友達との「憎悪と愛」が綯い交ぜになった二律背反的な新たな関係を最も雄弁に物語っている[7]。

しばしばゲーテの周りにいることは，私を不幸にするだろう。彼は自分の最も親しい友人達に対してさえ心中を吐露する謂れなど持ってはいない。彼は捉まえどころがないのだ。彼は異常なほどに利己主義者（Egoist）であると，私は実際信じている。彼は人間達を魅了し，大小の注意によって人の心を得る才能を所有している。しかし彼は自分自身を常に自由にしておく術を心得ている。彼は自己の存在を善行をなすもののように見せるが，それはただ神に似ているに過ぎず，自分自身を投げ出すことはないのだ。──これは自己愛（Eigenliebe）を最高に享受することを完全に計算に入れた徹底的かつ計画的な対処方法である，と私には思われる。このような人物を人間達は自分の周りに来させない方が良いだろう。私は彼の精神を心の底から愛し，彼を偉大だと考えているが，そのようなやり方ゆえに，私は彼が嫌いなのだ。私は彼を高慢な蒲魚娘と見做している。彼女の自尊心を辱めるには，子供を孕ませてやらなければならない。彼が私の心の中に喚起したのは，憎悪と愛の全く奇妙な混淆物であり，ブルータスとカスィウスがカエサルに対して抱いたに違いない感情に全く似ていなくもない感情だ。つまり，私は彼の精神を殺すことも再び心から愛することも出来る，と思う感情なのだ。

そしてゲーテにとって最も不幸なこととして挙げられるのは，シュタイン夫人との決裂である。彼女もまたゲーテを冷淡に迎えた友人達のひとりであった。二人の緊密な交際は，ゲーテがアウグスト公によってヴァ

イマルに招聘されて間もなくの1775年11月に始まった。1776年４月ゲーテはアウグスト公の傅育官を務めたこともある友人のヴィーラント（Christoph Martin Wieland: 1733-1813）に宛てた書簡の中で，自分がこれまで一度も体験したことのない，シュタイン夫人への情熱溢れる傾倒は「魂の彷徨 Seelenwanderung」と言う他ないと説明している[8)]。

> 僕はこの女性が僕に及ぼしている意義深さ──支配力を魂の彷徨による他に解釈することが出来ない。──その通り，僕達はかつて夫と妻だった！──今や僕達は自分達が一霊達の香気に覆い隠されていることを承知している。──僕は自分達──過去──未来──万有に相応しい名前を持っていないのだ。

ゲーテはイタリア紀行の間に綴った書簡の多くをシュタイン夫人に宛てて送っており，それらの書簡が基となって後年《イタリア紀行》(1829年）として大きく結実したことからも明らかなように，彼女の存在は旅行中の孤独なゲーテにとって大きな慰めであり，いわば掛け替えのない「心の伴侶」ともなっていた。しかし一方シュタイン夫人は，1786年９月３日ゲーテが旅行の目的地と期間をヴァイマルの友人達の誰ひとりにも告げることなくイタリアへ旅立ってしまい，これまで隠し続けてきた旅行の目的とその経過を11月１日になってローマに到着して初めて報告したことを快く思ってはおらず，ゲーテの帰国後もなお許し難い気持を抱いていたようである[9)]。

> ようやく私は口を開いて，我が友人達に愉快な気分でご挨拶を送ることが出来る。秘密にしていたこと，そして当地へのいわば地下の旅については，私に免じてご容赦願いたい。私は自分自身に対して，自分がどこへ行くのかを口にする勇気がなかったと言ってよいし，旅の途中ですら懸念をまだ抱いていた。そしてポルタ・デル・ポポロ門を潜って初めて私は，ローマを所有しているという確信を得たのだ。
>
> ところで，自分独りで目にするとは決して思わなかった様々なものの近くで，私は幾度となく，いや絶え間なく君達のことを思い起しているということも言わせてもらおう。誰もが身も心も北方に捉われておりこの地への印象が消え失せてしまったのを私が目にしたという，ただそれだけの理由で，私は長い孤独な道を歩もう，抵抗し難い欲求で私を惹きつけている中心地を探そうと決意することが出来たのだ。その通り，この数年間は一種の病気のような状態となり，私の病気を癒してくれることが出来るのは，この地を見つめこの地に居ることだけであった。今となっては告白しても構わないが，結局私はラテン語の書物もイタリアの地を描いた素描ももはや見つめる必要はなかったのだ。この地を目にしたいという欲望は成熟の域を越えていたのだ。

このように南方的なものに対する全面的な称賛とそれに反比例するかのように北方的なものに対する一方的な嘆きを語るゲーテの言葉は，シュタイン夫人の心に到底届くものではなく，彼女の気分を極めて深く侵害するものとしてしか伝わらなかった。実際にイタリアを自分の足で歩き自分の目で見てきたゲーテは，長篇小説《親和力 Die Wahlverwandtschaften》の主人公のひとりであるエードゥアルト（Eduard）がその妻シャルロッテ（Charlotte）にとってそうであったと同様に[10)]，ヴァイマルの地を終生離れることがなかったシュタイン夫人にとっては，精神的に遥か彼方の存在となったしまったようである。

そうした経緯に加えて，1789年の初頭にシュタイン夫人がゲーテとクリスティアーネの関係を知るに及んで，両者の精神的な関係は決裂状態を迎える。５月４日シュタイン夫人が「クリスティアーネか自分か，いずれかを思い切るよう選んで欲しい」という内容の書簡を送ったことに対して，ゲーテは彼女の友情の持続に大いに価値を置いていることを力説し，クリスティアーネとの関係には何ら深い性質のものはないとして，シュタイン夫人の要求を拒絶する。ゲーテは６月１日シュタイン夫人に宛てた書簡の中で，帰国当初に抱いた友人達に対する否定的な印象と反比例する形で「哀れな娘 das arme Geschöpf」クリスティアーネとの肯定的な「関係」に初めて触れている[11)]。

> 自分がイタリアに何を残してきたのかについて，私は繰り返し申したくありません。
>
> あなたはこれに関する私の信頼を実に無愛想に受け取られました。
>
> 私が帰り着いた時，あなたが奇妙なご気分のうちにあったことは残念です。私は正直に告白しますが，あなたが私を迎えられた様子，他の人々が私を迎えた様子は，私にとって極度に手厳しいものでした。私はヘルダーと大公妃が旅立たれるのを見送り，馬車の中には私のためにと切に勧めら

れた席がひとつ空いているのを目にしました。私は友人達のために帰ってきたと同様，友人達のために残りました。そして同じ瞬間，私が自分に向かって執拗に繰り返し言わざるを得なかったのは，「お前はここにいなくても差し支えなかったのだ。何しろお前は人々に何の関心も持っていないのだから」などということでした。そしてこれら全てのことは，あなたをこれほどひどく傷つけると思われるある関係が問題となり得る以前のことでした。

そしてそれはどのような関係なのでしょうか。それによって損害を被る者などいるのでしょうか。私があの哀れな娘に惜しみなく与える感情に対して，また私がその娘と過ごす時間に対して文句を言う者などいるのでしょうか。

このようにゲーテは，自分とクリスティアーネの関係は二人だけの問題であり，たとえシュタイン夫人であろうとも他者の介在・干渉は絶対に許容するものではないという決然とした姿勢を取っている。それゆえゲーテはクリスティアーネに対する自己の関係とシュタイン夫人に対する自己の関係とは何ら相互に矛盾することなく両立し得るものと把握しているようである。しかしゲーテのこの姿勢はシュタイン夫人に到底通じるものではなく，両者は決裂してしまう。ゲーテなりに決裂状態を回避しようとした試みは失敗に帰し，シュタイン夫人にとってのゲーテは，「天から落ちた美しい星のような」存在に過ぎなくなる[12)]。両者の関係が回復したのは，五年後のシラーの仲介を通してであった。

他方，シュタイン夫人との決裂を早める原因となったゲーテとクリスティアーネの関係は，ゲーテがイタリアから帰国した三週間後の1788年７月12日イルム河（Ilm）沿いのヴァイマル公園での出会いに始まっている。1765年６月１日ヴァイマルに生まれたクリスティアーネは父ヴルピウス（Johann Friedrich Vuplpius: 1725-1786）が初婚時代に産んだ六人の子供のうちの第三子であり，1749年８月28日生まれのゲーテよりも十六歳ほど若く，ゲーテと知り合った頃は二三歳であった。父ヴルピウスは1766年以来ヴァイマル公国の文書係（Amtsarchivar）を務める下層官吏階級に属していたが，ある服務違反を犯した罪──料金横領罪と見られている──で，1782年４月30日と５月３日の両日に開かれた枢密院（das Geheime Consilium）会議──ゲーテも臨席していた──において彼の文書係解任と道路普請業務への左遷が決定された。この時以来酒浸りとなって振顫譫妄（Säuferwahnsinn）を発症した父に代わって家計を支えるために，クリスティアーネは，アウグスト公の秘書官や私財管理人を務めたこともあるヴァイマル在住の手工業者ベルトゥーフ（Friedrich Johann Justin Bertuch: 1747-1822）が新たに設立した造花工場で働き，父の再婚で産まれた四人の子供のうち唯一生き残った病弱な異母妹エルネスティーネ（Ernestine Vulpius: 1779-1806）とともに叔母（Juliane Auguste Vulpius: 1734-1806）の家で暮らしていた。工場での仕事の内容は，中流階級の仕事のない娘達を集めてパリ風の美しい造花を造らせるというものであった。このような状況のクリスティアーネとゲーテの出会いをもたらしたのは，ニュルンベルク在住のある男爵の私設秘書として働いていた兄クリステイアン（Christian August Vulpius: 1762-1827）──後年《盗賊隊長リナルド・リナルディーニ Rinaldo Rinaldini, der Räuberhauptmann》（1798年）などを執筆して流行作家となった──が失業に迫られる自己の窮状を訴えて取り成しを求めるゲーテ宛ての請願書を妹に持たせたことにあった。出会いの翌日に早くもクリスティアーネは叔母と異母妹を連れてヴァイマル公園内にあるゲーテのガルテンハウス（Gartenhaus）に迎え入れられ，家政の切り盛りをすることとなった。この頃の彼女の外見は美しいというよりも可愛らしく，淡褐色の肌をしており，顎と頬は丸みを帯び，狭い額は美しい暗褐色の巻き毛で半ば隠されていた，という。《ローマ悲歌 Römische Elegien》第四歌（25-30行目）はゲーテと出会った頃の彼女の面影を活写していると言われている[13)]。

かつて女神が　俺のところにも　褐色掛かった肌の少女となって現われた
髪が黒く豊かに　額の上に落ち掛かり
短い巻き毛が　華奢な小さい首の周りに巻きつき
編み込んでいない髪は　頭の天辺から縮れていた
そして俺は誤たず　先を急ぐ女神を捉えた
愛らしく呑込み顔で　女神は抱擁と口づけをやがて俺に返した

Einst erschien sie auch mir, ein bräunliches Mädchen, die Haare
Fielen ihr dunkel und reich über die Stirne herab,
Kurze Locken ringelten sich ums zierliche Hälschen,
Ungeflochtenes Haar krauste vom Scheitel sich auf.
Und ich verkannte sie nicht, ergriff die Eilende: lieblich
Gab sie Umarmung und Kuß bald mir gelehrig zurück.

ゲーテ自身ある夫人から自らの結婚のことを問われて，

「私は結婚しております，ただし式は挙げずに」と答えている通り[14]，二人の最初の関係は婚姻の法的手続きを踏まないいわゆる内縁関係であり，1789年12月25日に長子アウグスト（Julius August Walther von Goethe: 1789-1830）――五人の子供のうち成人したのは彼だけであり，1802年に法的に認知された――が誕生したことを契機として，クリスティアーネは初めてフラウエンプラーン（Frauenplan）広場に面したゲーテの広大な家に移り住んでいる。そして二人がヴァイマル宮殿内のヤーコプ教会（Jakopskirche）で結婚式を挙行し正式な婚姻関係を結んだのは，ヴァイマルに進駐したフランス軍の兵士達がゲーテの家で乱暴狼藉を働いたことにクリスティアーネが勇敢に立ち向かった直後の1806年10月19日のことであり，同居生活を開始してから既に十八年の歳月が経過している。結婚を二日後に控えた17日ゲーテは結婚式に臨む決意を，宮廷説教師であるギュンター（Wilhelm Christoph Günther: 1755-1826）に告白している[15]。

> 近頃昼となく夜となく，私の年来の決意が熟して参りました。私にこれほど尽くしてくれ，試練のこの時期にあっても私とともに生き抜いた私の可愛い女友達を，完全にそして婚姻上正式に私は認知したいのです，自分の妻として。…

若い頃のゼーゼンハイム（Sesenheim）時代のフリーデリケ・ブリーオン（Friederike Elisabetha Brion: 1752-1813）やリリー・シェーネマン（Anna Elisabeth（Lili）von Schönemann: 1758-1817）との恋愛体験以来，中年に差し掛かってもなおゲーテの心を支配続けていたのは，結婚のもたらす安定の喜びよりもむしろ，結婚による束縛を怖れる不安であった。これはひたすら，何ものにも妨げられることのない自己の精神の自由を確保しつつ，自己形成の永遠の完成を探究し続けるゲーテの生き方そのものに基づくものであり，巷間言われるクリスティアーネの出自の貧しさやゲーテとの教養の違いは，二義的なものに過ぎないであろう。クリスティアーネがゲーテに初めて家庭と家族をもたらした女性であったということ，そして「ゲーテは官能的になってしまいました」[16]と発言するシュタイン夫人を急先鋒とするヴァイマルの人々が非難を浴びせれば浴びせるほど，「純粋なものは，このような浄めの火の中で試練に耐える他どうしようもないのだ」[17]とゲーテが吐露したように，そのような誹謗中傷に何ら関わり合うことなく，二人の結婚生活が幸福のうちに営まれたということ以上に，イタリアの世界がクリスティアーネという具体的な形姿となって，帰国後の孤独なゲーテの目の前に現われたということが，まさしく詩人ゲーテにとって極めて大きな恵みとなったのである。彼女が官能的な実生活に留まらず，実り多い精神的な生をもゲーテにもたらしたことは，この詩《訪れ》の中にも十分に看取することが出来よう。八〇行に及ぶ二行詩（Distichon）形式で綴られた教訓詩《植物の変態 Die Metamorphose der Pflanzen》（1798年）もまた，植物の成長段階における形成作用に重ね合わせてクリスティアーネとの愛を彼女に向かって語り掛ける恋愛詩であり，ゲーテはこう結論付けている（71-80行目）[18]。

> おお　それではお前も　思い起しておくれ　知遇という芽から
> 　次第に私達の心の中に優しい習慣が萌え出て
> 友情が力強く私達の心の中から姿を現わした様を
> 　そしてアーモルが遂に花と果実を産み出した様を
> 思い浮べておくれ　ある時はこの形態を　ある時はあの形態を
> 　静かに展開しつつ　自然が私達の感情に何と多様なものを授けたかを！
> お前も　今日という日を喜んでおくれ！　聖なる愛が
> 　同じ心情　同じ物ごとの見方がもたらす至高の果実を
> 得ようと努めるのは　調和の取れた観照の中で
> 　一組の男女が結合し　高次の世界を見出すためなのだ
>
> O, gedenke denn auch, wie aus dem Keim der Bekanntschaft
> 　Nach und nach in uns holde Gewohnheit entsproß,
> Freundschaft sich mit Macht aus unserm Innern enthüllte,
> 　Und wie Amor zuletzt Blüten und Früchte gezeugt.
> Denke, wie mannigfach bald diese, bald jene Gestalten,
> 　Still entfaltend, Natur unsern Gefühlen geliehn!
> Freue dich auch des heutigen Tags! Die heilige Liebe
> 　Strebt zu der höchsten Frucht gleicher Gesinnungen auf,
> Gleicher Ansicht der Dinge, damit in harmonischem Anschaun
> 　Sich verbinde das Paar, finde die höhere Welt.

そして1813年８月26日ヴァイマルからイルメナウへ向かう旅の途上でゲーテが綴った五連二〇行の掌篇詩

《見つけたり Gefunden》[19]は，クリスティアーネを森の日陰にひっそりと咲く可憐な一輪の花に仮託した最も純粋な抒情詩のひとつと言ってよいであろう。

俺は森の中を
こんな風に独り歩いて行き
何ひとつ探し求めなかった
これが俺の気持ちだった

日陰に　俺が目にしたのは
一輪の小さな花の立ち姿
星のように輝き
小さな瞳のように美しい

俺が手折ろうとした時
花はか細い声で口にした
手折られたままに
枯れてしまえと　おっしゃるの

俺は花を根こそぎ
掘り出して
綺麗な家の
庭に運んだ

そして　花は元通り
静かなところに植えられた
今や　花は絶えず枝を出し
この通り　咲き続けている

Ich ging im Walde
So für mich hin,
Und nichts zu suchen,
Das war mein Sinn.

Im Schatten sah ich
Ein Blümchen stehn,
Wie Sterne leuchtend,
Wie Äuglein schön.

Ich wollt' es brechen,
Da sagt' es fein:
Soll ich zum Welken
Gebrochen sein?

Ich grub's mit allen
Den Würzlein aus,
Zum Garten trug ich's
Am hübschen Haus.

Und pflanzt' es wieder
Am stillen Ort;
Nun zweigt es immer
Und blüht so fort.

＊

詩《訪れ》は，過去時制を基調とした物語風な詩句と，直接話法的な現在時制を用いた〈俺〉の独白の詩句とによって全体的に構成されている。第九連から第十一連にかけての十行の終局部と呼応している第一連の四行は，恋する男の恋人への〈訪れ〉の導入部を形成しており，前半二行が物語風の詩句，後半二行が独白となっている。詩の表題《訪れ Der Besuch》の動詞形である〈訪れる besuchen〉の代わりに〈忍び込む beschleichen〉という動詞が用いられていることからも明らかなように，〈俺〉と〈少女〉との関係は極めて親しいものであるとともに，世間に公言を憚られる秘めた関係であることが看取される。しかも少女の家の戸口が閉ざされているために〈俺〉は「最愛の女の許に忍び込」むのを諦めるどころか，ポケットに仕舞い込んでいる少女の家の鍵を使って戸口を開けるだけになおさら，二人の関係は親密なものであることが推測される。

二一行に及ぶ第二連から第五連にかけての四連においては，〈俺〉が家の中で少女の姿を見出す様子が描かれている。第二連で〈俺〉は一枚一枚ヴェールを剥がすかのように「玄関の間」を通り少女の「部屋」を経て「寝室」へとようやく辿り着くのだが，そこに見出されるものは，ソファの上で服を身につけたまま眠り込む少女の実に愛らしい姿である。第三連では，少女が編み物をしながら眠り込んでしまったことが知られるが，〈俺〉は「傍らに腰を下ろし」ながら，少女の目を醒ましたものかどうか躊躇っている。冒頭の二連で示した積極性とは裏腹に，〈俺〉がここで初めて戸惑いを見せるのは，少女が眠っていたことの意外さというよりは，眠っている少女の姿そのものが彼に感動を与え始めているからである。第四連においてその少女の姿が具体的に描写されている。〈俺〉が閉じられた「瞼」・「唇」・「両頬」・波打つ「胸」などの少女の形姿から読み取り，その内面から放射される「快い平安」・「静かな誠実」・「愛らしさ」・「良き心の無垢さ」などの様々な精神的な美しさは，彼に深い印象を与えずにはおかない。「神々の甘美な香油」と呼ばれ少女を憩わせる眠りが「四肢のひとつひとつ」を好ましく

解き放つという表現は，ゲーテが親しんだ古代ギリシア最大の詩人ホーマー（Homer）の作品に既に見られるものであり，同時代の詩人フォス(Johann Heinrich Voss: 1751-1826）がドイツ語に翻訳した叙事詩《オデュッセイア Odyssee》では〈甘美な微睡み der süße Schlummer〉(第十九の歌 551行目)として，《イリアス Ilias》では〈妙なる微睡み der ambrosische Schlummer〉(第二の歌19行目)として描写されている[20]。 第五連において，少女の姿を眺めているうちに彼女を起こしたい気持が〈俺〉の心から次第に消え失せて行くのは，つまり少女の姿を眺めた時の心からの喜びが彼の欲望を沈静化するのは，編み物に疲れた少女の眠りを妨げることへの気遣いというよりもむしろ，美に捉えられた者はその美の前では深い沈黙を余儀なくされるということの証左であろう。そのことは「密かに縛られ」という言葉に十分含意されているものと思われる。

第六連と第七連の十二行は，「俺は思った」という言葉が挿入されている通り，〈俺〉の独白となっている。人が自意識のある覚醒状態では不都合な知られたくないことを隠していることは大いにあり得るが，それだけに，抑制されている本心が無意識の睡眠状態においては何らかの形で露呈されることもあろう。しかしこの詩の少女の場合，そのようなことは何ひとつ当て嵌まらない。覚醒している時の少女の「優しい目」や「甘美な唇」，「両腕の魔法の枷」，「甘美な言葉の魅惑的な伴侶たる手」などの動きによって完全に魅了されてしまった〈俺〉は，身動きひとつしないで無防備に横たわっている今の少女の形姿を，却って冷静な目で観察することが出来る。《ローマ悲歌》XⅢ(47-52行目)[21]では，恋人の〈目〉が恋する男にどれほど深い影響を及ぼすのかが描かれている。

[神々しい目よ] 閉じていてくれ！　お前達は俺を混乱させ酔わせ
純粋な観照を静かに味わうことを　あまりに早く奪い去る
この姿形は何と偉大に　手足は何と気高く　延ばされていることか！
アリアドネがこれほど美しく眠っていれば　テセウスよ　お前は逃れ去ることが出来たのか
この唇に一度だけ口づけを！　おお　テセウス　さあ別れ行け！
彼女の目を見よ！　彼女は目を覚ます！――今や永遠に彼女はお前を虜にするのだ

Bleibt geschlossen! ihr macht mich verwirrt und trunken, ihr raubet
Mir den stillen Genuß reiner Betrachtung zu früh.
Diese Formen, wie groß! wie edel gewendet die Glieder!
Schlief Ariadne so schön: Theseus, du konntest entfliehn?
Diesen Lippen ein einziger Kuß! O Theseus, nun scheide!
Blick' ihr ins Auge! Sie wacht! ── Ewig nun hält sie dich fest.

このように恋人の〈目〉は開けばただそれだけで相手の男の心を混乱させ酔わせてしまう危険この上ないものであるが，この詩の少女の〈目〉は閉じられているため〈俺〉の「純粋な観照を静かに味わうことをあまりに早く奪い去る」ことはなく，また〈アーモル〉が「目隠しもせず」彼を見守っている以上，少女の「価値」に対する彼の愛が彼自身を欺くことは決してない。目隠しをしない〈アーモル〉という形象は，愛が偶然の戯れの時期をもはや過ぎて，相手を愛の対象として明確に捉える必然的な愛へと高まって行くことの表現と見做すことが出来よう。

第八連の四行では，これまで歌われてきた身体的な具象を通して現われた少女の精神的な美しさと，その少女に対する〈俺〉の愛を素直に喜ぶ気持が描かれている。そして第三連，第五連に続く，少女を起こそうという気持は完全に断念されている。

第九連以下の最終十行は前述したように，この詩の結末部を構成している。第九連は動詞の現在形が用いられてはいるが，出来事の経過を述べる説明的な詩句に属している。〈俺〉が少女のために橙をふたつと薔薇を二本携えてきたことが，ここにおいて初めて明らかとなる。そして〈俺〉が少女の家に「忍び入」ったと同様にそこを「こっそりと忍び出る」ことが簡潔に説明される。第十連，第十一連において〈俺〉が発する独白は，少女が確実に眠りに落ちているという彼の確信に基づいて吐露される言葉である。少女が眠っていることに関しては，何ら客観的な裏付けはないのだが，彼の目に映った少女の姿形に対する印象深い描写だけで十分にその保証となっているものと思われる。最終行の「捧げ物」については，「贈り物の意味であるが，没我的な断念（selbstloser Verzicht）の響きが篭もっている」，とシュテファン・ツヴァイク（Stefan Zweig: 1881-1942）が指摘する通り[22]，少女に対する〈俺〉の性急な思いは確かに断念されている。しかし「俺の優しい愛のこの捧げ物を倍にして報いてくれる

のだ」と歌われているように，〈俺〉は「捧げ物」を最終的に断念したわけでは決してなく，その場の一時的な自制心に対する報いをあくまでも期待している様子は明白である。後年ゲーテは《詩と真実 Dichtung und Wahrheit》（第三部十四章）の中で「無私の精神」について心中を吐露している[23]。

> 全てにおいて無私である（uneigennützig）こと，とりわけ恋愛と友情においてこの上なく無私であることは，私の最高の願望であり主義であり実践とするところであったので，『私があなたを愛しても，あなたに何の関わりがあるのだ』という後年の大胆な言葉は，全く私の心の底から発せられた言葉なのである。

しかしながらこの「無私の精神」を理想とするゲーテの境地はこの詩ではまだ達成されていない。この詩の場合，人を愛することだけを願い，愛し返されることは望まないという，いわば自己充足的な神的な愛の発露である「無私の精神」が到達されるに至っていないだけに却って，愛に対して愛で報いるという人間共通の願いが素朴に歌われていると言ってよい。それとともにこの詩では，精神的なものと感覚的なものとの間の危うい均衡の上に，愛と幸福を見出していることが感得されるが，それは畢竟，詩人ゲーテが精神と身体の両面に亙るクリスティアーネとの具体的な愛の姿を直接的な契機として，イタリアでの経験を一篇の抒情詩に具象化し結実させたものと言ってよいであろう。そして《イタリア紀行》中に創作された二篇の抒情詩《クピード》と《風景画家としてのアーモル Amor als Landschaftsmaler》[24]において既に際立っている通り，この詩においても，ゲーテがイタリアで獲得した具象的な明澄さと静謐の雰囲気が充分に醸し出されているのである。

＊

ゲーテは，1816年６月６日掛け替えのない最愛の妻であり，生命全体の根源とも言うべき「太陽」クリスティアーネを亡くして深い絶望感に襲われた時，永遠の伴侶の取り返し難い「喪失」を追悼する四行詩《1816年６月６日に》をヴァイマル公園内の墓碑銘に捧げることによって，この詩はゲーテのみならず後世の人々の心にも永遠に残る記念となった[25]。

> ああ太陽よ　お前は陰欝な雲間に
> 輝こうとしているが　無駄なことだ！
> 私の生が獲得したもの全体が
> 存在するのは　彼女の喪失を悼むためなのだ
>
> Du versuchst, o Sonne, vergebens,
> Durch die düstren Wolken zu scheinen!
> Der ganze Gewinn meines Lebens
> Ist, ihren Verlust zu beweinen.

晩年のゲーテにとって，クリスティアーネは波瀾の生を二八年もの間まさしく「ともに生き抜いた」唯一無二の存在であるがゆえに，その「喪失」は，《朝の嘆き》の少女の不在を嘆く男の悲愴感が到底比肩し得ないほどの，生涯に亙る「痛手」となったのであろう。クリスティアーネの死から四年を経た1820年８月，イェーナ滞在中のゲーテを訪問したある女性はフォン・クネーベル夫人から伝え聞いた話として，今もなお悄然としたゲーテの様子をこう綴っている[26]。

> 「…夫人は」とフォン・クネーベル夫人は言った，「とても朗らかな気分の持主で，ゲーテを勇気づける術を心得ており，彼のことをとても正確に見抜いていて，彼に心地よいと思わせるには，どんな調子を取らなければならないのか，常に弁えていました。夫人は大して教養のある女性ではありませんでした」。彼女は言い添えた，「でも夫人は生来の明晰な理解力を大いに持っていました。ゲーテが私どもにたびたび話してくれたことなのですが，自分の頭の中である問題に取り組んで，考えという考えがあまりにも強く自分のところに押し寄せてくると，彼は行き過ぎて正しい道がもはや分からないことが時折りある，ということでした。そんな時彼は夫人のところへ行って，その問題を分かり易く持ち出すと，夫人が生来の嘘偽りのない炯眼を持っていつも直ぐに正鵠を得た答えを探し出すことが出来る姿に，たびたび驚嘆せざるを得ない，そして彼は夫人にこの点において既に相当なお陰を被っている，ということでした」。フォン・クネーベル夫人は私にこうも言った，ゲーテは夫人の死をどんなに深く感じ取っていたか，そして彼は今もなお依然として彼女の喪失の痛手から立ち直ることが出来ないでいるか，ということを…。

註

I

１）J.W.v.Goethe: Morgenklagen. In: Goethes Werke. Hamburger Ausgabe（HA）in 14 Bden. Textkritisch

durchgesehen u.mit Anmerkungen versehen von Erich Trunz.9.Aufl.Hamburg 1969. Bd.1.S.239-41.

2）Brief von Caroline Herder an ihren Mann. 1.Oktober 1788. In: Goethes Gespräche（GG）in 5 Bden.Eine Sammlung zeitgenössischer Berichte aus seinem Umgang, auf Grund der Ausgabe u.des Nachlasses von Flodoard Freiherrn von Biedermann, ergänzt u.herausgegeben von Wolfgang Herwig. Zürich u.Stuttgart 1965. Bd.1.S.449.Nr.897.

3）J.W.v.Goethe. Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe（MA）in 26 Bden. Herausgegeben von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G.Göpfert, Norbert Miller u.Gerhard Sauder.München 1990.Bd.3・2.S.439.

4）J.W.v.Goethe: Cupido, loser, eigensinniger Knabe…… In: HA.Bd.1.S.237.
拙稿『ゲーテと愛──詩《クピード》を巡って──』(島根医科大学『島根医科大学紀要』第19巻 1-15頁　平成８年12月)を参照されたい。

Ⅱ

1）J.W.v.Goethe: Der Besuch. In: HA.Bd.1.S.237-9.

2）Brief an Göschen. 6.November 1788. In: MA.Bd.3・2.S.440.

3）Brief an den Herzog Karl August. Jena den 16. November 1788. In: J.W.v.Goethe. Gedenkausgabe（GA）der Werke, Briefe und Gespräche in 24 Bden. Herausgegeben von Ernst Beutler.3.Aufl.Zürich u. München 1982.Bd.19.S.125-6.

4）Brief an den Herzog Karl August. Rom den 17. März 1788. In: GA.Bd.19.S.104-7.

5）Brief an Charlotte von Stein. 22.Juli 1788. In: GA. Bd.19.S.120.

6）J.W.v.Goethe: Schicksal der Handschrift. In: HA.Bd. 13.S.102.

7）Brief von Schiller an Körner. 2.Februar 1789. In: G G.Ⅰ.S.463-4.Nr.936.

8）Brief an Christoph Martin Wieland. Weimar April 1776? In: HA.Briefe.Bd.1.S.212.Nr.144.

9）J.W.v.Goethe: Italienische Reise. Rom den 1. November 1786. In: HA.Bd.11.S.125.

10）J.W.v.Goethe: Die Wahlverwandtschaften. Ein Roman. In: HA.Bd.6.S.242-490.

11）Brief an Charlotte v.Stein. In: HA.Briefe.Bd.2.S.115-6.Nr.487.

12）Brief von Charlotte von Stein an Charlotte von Lengefeld.Weimar 29.März 1789. In: Charlotte von Stein und Johann Wolfgang von Goethe. Die Geschichte einer großen Liebe. Herausgegeben von Renate Seydel.München 1993.S.315.

13）J.W.v.Goethe: Römische Elegien.Ⅳ. In: HA.Bd.1.S. 159-60.

14）Brief von Charlotte Schiller an Charlotte von Stein. 30.Juli 1790. In: GA.Bd.23.S.875.Nr.2327. „Ich bin verheiratet, nur nicht durch Zeremonie.“

15）Brief an Wilhelm Christoph Günther. Weimar 17. Oktober 1806. In: HA.Briefe.Bd.3.S.28.Nr.839.

16）Brief von Caroline Herder an ihren Gatten. 14. August 1788. In: GA.Bd.22.S.167.Nr.244.

17）Brief an Knebel.31.Dezember.1798. In: Goethes Werke. Herausgegeben im Auftrage der Großherzögin Sophie von Sachsen.Weimar 1887-1919.Ⅳ.Abteilung.Bd.13.S. 364-5.Nr.3962.

18）J.W.v.Goethe: Die Metamorphose der Pflanzen. In: GA.Bd.1.S.203-6.

19）J.W.v.Goethe: Gefunden. In: HA.Bd.1.S.254-5.

20）Homer: Odyssee. Übersetzt von Johann Heinrich Voss.Reclams Universal-Bibliothek Nr.280-3.S.287.
Homer: Ilias. Übersetzt von Johann Heinrich Voss. Reclams Universal-Bibliothek Nr.249-53.S.23.

21）J.W.v.Goethe: Römische Elegien.ⅩⅢ. In: HA.Bd.1. S.165-7.

22）J.W.v.Goethe: Gedichte. Auswahl und Einleitung von Stefan Zweig.Reclams Universal-Bibliothek Nr.6782-4.S.235.

23）J.W.v.Goethe: Dichtung und Wahrheit. In: HA.Bd.10. S.35.

24）J.W.v.Goethe: Amor als Landschaftsmaler. In: HA. Bd.1.S.235-7.
拙稿『ゲーテと愛──詩《クピード》を巡って──』を参照されたい。

25）J.W.v.Goethe: Den 6.Juni 1816. In: HA.Bd.1.S.345.

26）C.F.v.Both: Ein Besuch bei Goethe und Knebel in Jena.1857. In: GG.Bd.Ⅲ/1.S.200-1.Nr.4796.

（受付　1999年10月29日）